ラブカクテルス　その７４

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス　その７４

【Ｎコード】

Ｎ７２３２Ｅ

【作者名】

風　雷人

【あらすじ】

今宵は長い道のりの果てに出来たカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前は配達でございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺はチャイムを鳴らした。
いつもと違ってさすがは豪邸だ。
チャイムの音は品格に満ちた音を響かせて俺の訪問を主に知らせる。
きっとセンスのよい気品に溢れる対応の返事が返ってくるのだろう。
俺は目の前に広がる立派な門を構えたその屋敷のインターホンの前で、イヤミのない営業スマイルを浮かべ、しばしその時を待った。
どなたでしょうか？
凄みのあり、そしてやはり品がある、それに加えて貫禄さえ伺える声が、スピーカーから俺に応えてくる。
ケロケロ配達のものです。お届け物をお持ちしました。
俺は元気良くそう、インターホンに近づき話すと、その立派な門は音も無く、重厚な扉を開けた。
インターホンの声の主は、玄関まで頼むわと、無表情な声で俺を招

いた。
俺はありがとうございますと礼を言い、車を運転してその広い敷地内に進んだ。

広いなんて言葉も通用する訳がないその敷地は入ったはいいが、行けども行けどもなかなか建物らしきものが見えて来なかった。
途中で何ヶ所かの交差する道には出くわしたが、門扉のインターホンでは何も言っていなかったせいで、俺はとりあえず真っ直ぐ走ってきた。
だが、どこかを曲がるのだったんだろうか？
俺は不安になった。
車のスピードを弛めてあちこちをキョロキョロしながら走っていると、そこにインターホンの様なものが道ばたに立っていた。
いや、確かにインターホンである。
初めての方や、迷ってしまった方はこちらからどうぞ。
インターホンにはそう書かれてある。
そして大きく数字で5の札が掲げられてある。
俺は、これで道を尋ねればいいのかと考えたが、プロのドライバーが道に迷うなんてなかなか言えたものでもない。
俺は少し悩んだ。プライドを取るか、スピーディーな仕事を優先するか。
当然後者か。
俺は小さく溜め息をついてインターホンをしぶしぶ押した。
先ほどの入り口と同じ、品に溢れるインターホンの音がしたかと思うと、はい。
何でしょうかと、予想より素早い反応で返事が返ってきたので、俺は営業スマイルを作るのに慌てて、かなり引き攣った表情になっているが自分でもわかった。
しかしそんな状態に於いても、口調は冷静さと丁寧さを保ち、失礼がないように尋ねることには成功した。

申し訳ございません。どうやら道に迷ってしまったらしいのですが、玄関までの道をもう一度お聞かせ下さいませんか？
するとインターホンの声は、そのまま真っ直ぐに進み、２１番の札のインターホンがあるところを右。と言って、最後に、もう少しですからお願いします。と付け加えた。
俺は礼をいいながら、２１を忘れないように何度か口で唱えながら車に戻った。

その先は、のどかで手入れの行き届いた芝生を両側に携えて、とても緑が気持ちいい道が続き、何だか眠くなりそうなその雰囲気に、俺は何度も目を擦り、例の番号の書いてある札を探した。
しかし長い。
長い一本道だ。
行けども行けども同じ風景が俺の時間と距離の感覚を麻痺させるようだ。
芝生の上では蝶達が舞い、ところどころで色とりどりの花々が派手過ぎずに、道と芝生の境に作られた花壇にセンスよく植えられている。
危うく仕事でここにいる事さえ忘れてしまいそうだった。
すると、突然雲行が怪しくなってきた。
生温かい風が、辺りに雨が降る事を知らせるように吹いてきて、雲はみるみる内に爽やかな空色に黒の絵の具を垂らしたように、にじみだした。
いつの間にか蝶達は姿を消して、その内車の窓にポツリと水滴が一つ、二つ、三つと音を立てて姿を現した。
眉毛を寄せて上を見ながら舌打ちをした途端、それに怒ったかのように突然雨は総攻撃を浴びせてきた。
俺は窓を閉めて、ワイパーを速めた。
それでも視界はかなり悪く、いきなりのこの豪雨に世話しなく動かされたワイパーも息切れをして、明日辺りは筋肉痛にでもなってし

まうのではないかと、心配になるくらいの頑張りようを見せていたが、それもなかなか通用しないくらいのひどい降りに、俺は思わずアクセルを弛めて、必死に２１の札を見逃さないように目を凝らした。
しかし車で良かった。
歩いて配達していたら荷物も俺もズブ濡れだった。
ハンドルを上の方で両手を合わせて持ちながら、その手の上に顎を乗せて、フーッと溜め息をつきながら、そんな事を考えていると、先にトンネルが見えてきた。
いくら屋敷の敷地が広いからってトンネルまで。
俺は呆れるしかなかった。
続いている道なりに走ると自然とその中に入るしかなかったが、それが失敗だったとは、この時点で判るはずもない。
俺はトンネルに入ると雨が遮られて視界が開けたのにホッとしたが、中は真っ暗闇でライトをつけてはみたが、先の方は全然どうなっているかわからない程、出口は遠そうだった。
しかし進むしか他にない。
俺はヘッドライトを頼りに、トンネルの先の先に向かって車を走らせた。

どれくらい走っただろうか？
暗闇はなぜか人の心を不安にさせる。
なんだかトンネルは段々と下に下り、気持ち狭くなっている気がしてならない。
しかし錯覚、暗さからの気のせいだろう。
そう思っていた。
だがしかし、やはり下っているのは間違いなかったようだ。
なんだかアクセルを踏まなくても車は勝手にスピードをあげるようになってきている。
徐々にではあるが、勾配はきつくなっているようだった。

俺はアクセルを離してブレーキを踏みながら、スピードを調整し始めた。
相当な下り坂だ。
それはしまいに体が前にのしかかってしまう程の急坂、いや、斜面と言ったほうがきっと正しい。
俺は恐怖を感じた。
どうなってしまうんだ。
俺は不安と恐怖に体を縮ませて、戻るかどうかを考え始めたその時、車のガラスが水面に叩きついた。
俺は思わず声を揚げた。
車はどんどんと水中へと潜っていく。
俺はパニックになりながらも、死にもの狂いで窓ガラスを割り、反射的に荷物を抱えて水面向けて泳いだ。
そして俺が水面に顔を出し、息をめいいっぱい吸うと、さっき下ってきた坂の上から、水が滝のような勢いで流れて来るのがわかった。
ヤバい。
俺は辺りを見回し、壁に登り梯子のような握り手がついているのを見つけ、片手に荷物を抱えながら必死に登った。
間一髪で滝のような水の流れから身を守り、眼下の様子を伺っていると、なんだ水位がだんだん上がってきている。
きっとあの豪雨のせいだ。
俺は迷うことなく、梯子のような握り手を片手で掴み、絶妙なバランスで登りだした。
相当な高さがある筈のその握り手梯子は、どこまでもどこまでも続いていて、俺は息も切れ、体力も限界にきていると感じてきた。
迫り来る水の勢いに諦めかけたその時、壁に扉があるのを見つけた。
開くか？
俺は思いっきりドアを蹴り跳ばした。
開いた！
転がるようにその入り口に身を任せ、入ったと同時に急いでドアを

閉めた。
その扉はしっかりとしまったようだ。
俺は息を荒く呼吸しながら、しばらく動けなくなり、いつの間にか寝てしまった。

ひどい頭痛で目が覚めた。
数回頭を振って、自分がどこにいるのか、何をしているのかを思い出そうとしたが、頭痛の次にきためまいでなかなか記憶が戻らない。
ふと、手に持っていた荷物に目が止まってハッと気付いた。
そうだ、配達の途中だった。
俺は立ち上がり、狭い通路の暗がりを壁づたいに歩いた。
なんだか体中が痛い。
それでもどうにかしてここから出なければ。
俺は必死になりながらとりあえず先に進み、なぜ俺がこんな目に合わなければならないかを愚痴った。
するとしばらくして、先に明かりが見えてきた。
俺の体は少し軽くなった気がして、足は小走りを始めた。
やっと出口らしい。
なんだか久しぶりに感じる外に、俺は思いっ切り体を弾け出させ、新鮮に感じる空気を惜しげもなく、めいいっぱい吸い込んだ。
落ち着いて周りを見回すと、そこには池、いや、海か湖ではないかと思うほどの広く、そして寛大な光景が広がっていた。
全ての出来事を飲み込んでしまいそうな、その穏やかな波の音は、癒しを俺に与えてくれる。
しかし暑い。
天気が良いのは結構なのだが、日差しがきつくて俺の体は一気に汗でびしょびしょになった。
仕方ない。
俺は仕事中ではあったが上着を脱いで、とりあえず宛てもなく海岸線のような水辺を沿うように歩いた。

白い砂浜に足跡を残しながら、転がる貝殻や、カニ達が時折姿を見せるのを横目に俺は、水平線の彼方に屋敷があるのだろうかと、途方もない行き先を想い、一層荷物のお届けをなんとしても成し遂げなければと、強い誓いを胸に抱いた。
すると、その水辺に人影を見つけた。
俺は思いっきり大声で叫んだ。
手も無意識に大きく振りながら、足も自ずから駆け足となって、その人影に歩み寄ると、それは美しい女の人だったが、カッコはなんだかボロボロの服装で、しかも俺の顔を見るなり泣き出し、抱きついてきた。
俺は訳がわからず、とりあえず泣きたいのはこっちの方なのに、先に泣かれてしまった以上は、受け止めるしかなかった。
俺は彼女にどうしたのかと訳を聞くと、彼女は少し落ち着いてから、ゆっくりと話し始めた。
しかしその話しには驚かされた。
なにしろ彼女は随分前に、この屋敷にピザを届けに来たらしいのだが、玄関に辿り着けずにさまよい、途方に暮れていたところだと言うのだ。
どれくらいの時間が経ってしまったのかは、時計が壊れてしまったために判らないらしいのだった。
俺は今の時間を確認しようとしたが、なんと、いつの間にか自分の時計も壊れていてそれが出来ない事に不安がよぎった。
完全に俺達は、世界から孤立してしまう。
そんな危機感とは裏腹に、波音だけは穏やかだった。
とりあえず、俺は彼女に番号の事を尋ねると、そういえばと、彼女は俺の手を取り、その心辺りに案内してくれた。
彼女の向かう先には鬱蒼と茂る草木、いや、見るからにジャングルだ。
その中をかきわけて進んだ先に、草の間から隠れるようにして、苔に被われた看板がひっそりと佇んでいた。

俺は慌ててそれに駆け寄り、草を退かすと、看板には１８の番号が書かれていた。
俺はきっともう少しだと感じた。
何か先に行く手掛りがないか？
俺は必死に探してみた。
すると、ある事に気が付いた。
看板の辺りだけ地面がしっかりとしていて硬い。
俺は必死に周りの草をむしり、その周辺の地面を表に出した。
やっぱり。
そこに出てきたのはアスファルトだった。
道だ。
俺は彼女の手を引いて、アスファルトの伸びている方へと歩き出した。
看板から伸びた道は、先に行けば行くほどだんだんと草が少なくなり、それに連れてきれいに整備されている拓けたものへとなっていった。
二人の足取りは軽くなった。
両側には銀杏の並木道がなんだかロマンチックな雰囲気をかもし出している。
空はとても高く、そして爽やかだった。
そこに看板があるのが見えて、俺達は少し小走りになった。
それには１９と書かれているのに、二人はホッとした。
もう目の前の筈だ。
まるで飛行機雲を追いかけるように二人は、道の先を急いだ。

しかし、あれからかなり歩いている筈だが、一向に屋敷らしいものは見当たらない。
俺は何だか体が冷えてきた気がした。
彼女を見るとその体も震えていた。

それもその筈だ。
空からは雪がチラチラと舞ってきたのだから。
先を急いがなければ。
俺は彼女の手をしっかりと握り、足を速めた。
次第に雪は積雪となり、足を停めようとするかのように、靴底にへばりついてきた。
息は白さを増し、段々体のあちこちの感覚が麻痺して来た。
二人は互いに励まし合いながら何とか足を進めたが、どうやら限界だ。
彼女は俺に、自分を置いて先に行くように言った。
俺はなけなしの体力で彼女をおぶり、もうどこが道だかもわからなくなった銀世界の雪の上を必死に進んだ。
もう、ダメだ。
そう思い、諦めかけてもたれ掛かった。看板。
看板！
俺は最後の力でその上に積もった雪を払った。
２１だ！
右手を見ると、屋敷の灯りが見えた。
俺は興奮のあまり、我も忘れて走った。
やっとだ！やっと屋敷にたどり着いた。
俺は彼女をおぶったまま、玄関のインターホンの呼び鈴を鳴らした。
あの懐かしい品のいい音と共に、は～いと言う返事が聞こえて間もなく、ドアが開かれた。
俺は久しぶりの営業スマイルで、荷物と、彼女の持っていたピザを手渡し、印鑑を書面に捺してもらった。
そしてありがとうございましたと、頭を深く落とすと、そのドアはあっけなく閉められた。
ホッとして座り込んだ俺に、彼女がこれからどうするかを聞いてきた。
俺は少し冷静になり、考えた。

そして提案した。
どうだろう？二人でまた、この屋敷を探険しながらアドベンチャーハネムーンっていうのは？
俺からのさりげないプロポーズに、彼女は笑って頷いたのだった。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7232e/

ラブカクテルス　その７４

2011年1月16日05時41分発行